



Title	副詞apenasと非数量化要素
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 2001, 25, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93846
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

副詞apenasと被数量化要素

出口厚実

0. はじめに

スペイン語の副詞apenasは否定辞noに近似する特徴をもち、否定語と同一視されないとしても、実質的に“否定”と同等な振る舞いを見せることがある。前稿(出口 1998, 1999)はこの副詞が放つ独特な直接・間接の作用がどのような外的環境に映し出されるかに注目することによって、その否定性の実態の一端を抽出しようと試みた。しかし、apenasの基本的な働きはこのような“否定”との関わりを軸にして規定されるべきかという疑問が前もって解決されていたわけではない。apenasには、また、ゼロに近い僅少さを暗示する数量指示の効力があるはずである。本稿はこれらの疑問を再提起するとともに、その答えを探るために、apenasが文中のどの構成要素に対して、どのような意味機能を果たすのかについて、考察範囲をやや広げてさらに詳しく調べてみたい。

現代スペイン語のapenasに帰されて、いくつかに区分される語義がお互いに無縁でなく、関連しあうのではないかという直感をもつ人は多いだろう。一方で、この副詞の用途の大半は上述のような、“近似否定(=casi no)”でなく、「わずか、たった、のみ」(=sólo)と訳出されるような評価的意味で多用され、統計上も前者と肩を並べるか、むしろ、使用域によってはそれを凌駕するくらいの頻度を記録している。apenasの原義とみなされがちな「ほとんど…ない」と、否定と一線を画した後者の語用論的解釈はどのような関係にあるのか。両者は多くの辞書定義の扱い方に見られるように、はっきりと独立した2義で、たまたま1つの語彙形式に同居していると理解するべきなのだろうか？

語彙意味や文法記述の観点から独立した用法ラベルを与えられ、両者を区別する特徴が注目されるのが常で、それらの内的なつながりを指摘したり、意味の絡まりを解きほぐそうとする試みは乏しかったのではないかと思われる。

apenasをめぐる一連の考察で、この語の基本機能をどのように把握すれば、用法の全般とそれぞれの意味の異なり方やそのズレの向き具合を合理的にまた簡潔に説明できるかを解明することを目指している。小考は、そのための資料として、従来、あまり顧みられなかった個別的用例の実証作業を重視して、出来るだけ多くの実例を出現文脈と共に確認しながら「ほとんど…ない」の意味

内容をさらに詳しく検討することに努めた。

1. apenasの分類

否定構文との関わりで、文法書の中で *apenas* が断片的に言及されることはあっても [cf. González García (1997: 348), Sánchez López (1999: 2561)], その全容を見渡した考究は見あたらなかった。手がかりの参照として役立ったのは、意外にも学習用辞書の1つ, *Diccionario Salamanca* (1996) である。そこでは接続詞的な用法として項目立てられたものを別にすれば、次の3主要タイプに整理されて、各々に例文と簡単なコメントが付されている (pp. 110–111)。

(1)

- A. 肯定構文で動詞に先行 (= *casi no*): *Apenas estudiaba.*
Apenas se le oye.
- B. 否定構文で動詞に後行 (= *casi*): *No estudiaba apenas.*
No se le oye apenas.
- C. 数量化にニュアンスを与える
 (= *escasamente, apuradamente*): *en apenas dos minutos, apenas año y medio*

一部の文法書や辞書¹⁾が行っているように *apenas* を一括りに「否定語」と呼ぶのではなく、むしろ、他に明瞭な否定辞が存在しないならば (つまり, B. タイプを除いて), *apenas* を伴う文を肯定文と見なしていることが、この見出し語の解説からわかる。

出口 (1998) では、文中で *apenas* が占める構造上の位置を独立変数として取り出して、“用法のタイプ”と切り離れたほか、上記のC.型に相当するものを、さらに2亜種に下位区分した。また、形容詞・副詞を直接修飾するタイプ, *apenas si* 構文, *sin* との組み合わせなどを別範疇に扱った²⁾。

(2)

- I. *Apenas pudo dormir aquella noche.*
- II. a. *Se casó con apenas 20 años y enseguida tuvo dos hijos.*
 b. *...era apenas un reflejo deslucido de la pasión total en que se consumía.*
 [出口 (1998: 32)]

「ほとんど…ない」と訳されるタイプ I. は、通例、apenasの最も基本的な用法とみなされる。ここではこの種の文における用いられ方を「近似否定」と名づける。その典型的な働きは動詞が実現する活動(事態)のあり方を極少量に局限するところにある。一方、これに対して、タイプ II a. b. 文の使用例ではapenas自らはこのような数量化作用をもたない。文中に共起する数量表現に対する話者の評価、特に、その値を可能性の下限として、その上方残余を排除する語用論的效果を示す。この用いられ方を「下限」、または「評価」的タイプと称することもできる。このとき、apenasは「わずか…、…にすぎない」などの訳語として表出される。

このような基本種別は多くの辞書で語義区分として反映されているし、また教育上も分かり易い用法分類としてその有効性を否定するものではない。ただし、apenasに対立的なこの2機能が背を向けあって共存しているとは考えにくく、実は1つの実質の異なる側面の見え方の違いではないだろうかという疑問も生じる。さらに、「近似否定」の語義がこの副詞のベースとなり、そこから派生的に「下限評価」の読みが関係づけられるという断定にも再考の余地があるように思われる。

2. apenasの原機能

apenasがいくつかの異なる基本モジュールを意味単位として組み込んでいるというよりも、1つの機能核を中心にその意味の広がりが見えられるのではないかと考える。通例、行われているのはapenasの意味源泉を「ほとんど…ない」と定めて、〈準否定→微量化〉または〈微量化→準否定〉を基軸にして、他の諸機能を派生的に導き出す記述かもしれない。

この副詞は、対象を臨界に達した直後のギリギリの状況にあると序列的に評価し、また、この要素がそれに代わり得る諸要素からなるリストの最も低位、許容範囲の最下に位置づけ、同時に、焦点を当てられた要素以外の可能性を排除する作用を持つ。

全体に対して「ごくわずか」のみ妥当であること、「微小な部分」として該当することの信号を与え得るのは、述語事態の成立に必要な最小限度の量的実質、つまり、その臨界あるいは下限がクリアされたことを含意するためである。小論が提案するのは、この“下限”+「評価」がapenas出現の根底に横たわっていて、「微量」の解釈は前者から展開され得るという分析である。

(3)

- a.“下限”(= 臨界)・「評価」→「微量化」
- b.“下限”(= 数量)・「評価」
- c.「(微・小・多) 量化」
- d.「排他」

apenasが固有に担う芯的機能と、他の要素と相まって果たす機能を確然と分離するのが難しいのは事実である。しかし、この副詞と共起関係にある他の数量、程度、数値の表現が、それ自身で明確な意味内容を有するのであれば、apenasが同時にこの機能をも組み込んでいるとみなす根拠は薄いであろう。

評価の焦点となる要素が動詞であるとき、いわゆる近似否定タイプとなる。その「数量」は既定値として algo, alguno等リンクされて、apenas ...algo [de...]/algunoが解釈されるという「微量化」の機能が惹起される。言い換えれば、その動詞の意味を成立させる(真であるに十分ならしめる)に必要な(もし必要なら)最低の数量、臨界プラス α を推論させて、これを焦点となる要素に見立てるのである。この「わずか」以外を排除するという点で、「ほんのわずかだけ」「ごく少しばかり」というパラフレーズが可能な状況である。

絶対的なスケールで照らして、apenasがターゲットとする数値が必ずしも微量でないときはなおさら、一般に数量表現が明示されるとき、apenasはそれ自身で何らかの量化を表していないと仮定することができる(3b)。apenasを削除してもその量的中身は変化を受けない点で(3a)と区別できる。そうすると apenasの出現はa.またはb.いずれかの任務のみを果たしていると考えられる。他方、タイプc.はpoco, mucho, algo, etc.やその他の数量表現により担われ、また、d.はsolo, solamenteなどにより表現されるものとする³⁾。

この分析に従えば、統語形式としてneg+動詞+apenasに実現される“準否定”が、分布の上で、予想に反して、少数派[全体のわずか4%強]であったことに納得がいく(出口1998: 36)。すなわち、このパターンのnoはapenasの作り出すこのようなゼロ近接環境のゆえに(“否定に近い極端の場合にのみ”)寄生した「虚辞的」noであるとすれば、なぜapenasが他の否定語とハッキリと異なった分布の仕方を示すのかの説明が容易になる。副次的に誘起したnoが今度はapenasの否定性をさらに強めるという相乗作用を引き起こしているかもしれないにしても...

さらに、近似否定と「微量化」は実は1つの実態の異なる局面にすぎないとい

う点も明らかであろう。目盛りの起点(臨界)に近い数値「微量化」の指針位置を中心に、鏡像側に除外される圧倒的部分が存在し、apenasを通じてこの反対側を暗示するのが否定的機能である。

3. apenasと数量化

apenasがそれ自身単独で示すと考えられる意味機能の可能性を出来る限り広く観察してその差異を見るためには、前記(2)の基本タイプ I, II から出発して、その分別基準の幅を細かく深く掘り進めるよりも、次のように、数量表現との共存関係に基づいた分類項目を中心に据えることが重要と考えた。「量化」の対象との関わり方に新たな視点を交えつつ、各々の実文例の異同と変種の様々を確かめることにする。

(4)

1. apenasの単独生起(明示的数量表現を伴わない)
 - 被数量化要素による分類
 - 1a. 動詞意味の量化
 - 1b. 統語項-主語, 直接目的語, 補完目的語, 述語補語の量化
 - 1c. 潜在統語項の量化
2. apenasと数量表現
 - 2a. 否定語・不定語との共起
 - 2b. 数値表現の統語特徴
 - 2c. 非数値表現

初めに、apenasがそれのみで動詞句内部において数量限定の修飾機能を果たす、典型的な構造を取り上げ、この副詞とそれに修飾される動詞および統語項との関係を見る。次に、“apenas + 数量詞”の表現に対してもいくつか下位類型を区分する必要がある、各タイプを設定する。そして、(4)1.の原型式が、各種の数量表現、とりわけnada, nadieなどの否定/不定語句とapenasが共存するケースに、どのように関連づけられるかを明らかにする。この後半部分については、精密数量表現(タイプ2b)と質的段階評価(タイプ2c)の各種表現を伴うapenasを含めて、紙面の関係で本編に収めることが出来なかったため、他所[出口(to appear)]に発表される予定である。

3.1.apenasの単独生起⁴⁾

数量表現を伴わないで主に動詞の前位あるいは(no+)動詞の後位に現れるapenasは近似否定を表すのが普通である。このときapenas自身が数量補語または数量副詞として働くと思われ得る。本節はapenasが、文中のどのような統語構造・要素を数量的に限定(修飾)しているのかを中心に、具体的な外観とそれらの意味解釈をやや詳しく確かめておきたい。以下に観察した事項の多くはapenasに限られた固有の特徴ではなく、他の数量副詞や副詞一般に共通するはずであるが、その部分の詳説には立ち入らない。その理由は、副詞がどのように範疇化され、apenasがそのいずれに所属しているのかについて、筆者がしっかりと体系化していないために、その知見を踏まえた記述の的確性と簡潔性を見込むことが出来ないためである。

3.2.apenasのベース圏

動詞句内部に位置するapenasが数量化する対象は動詞そのものに限定されることもあるが、動詞句内部の他の要素や、他の文構成成分に及ぶことがある。その場合、どのような統語関係にある要素を傘下に収めることが出来るのかを個別に見てみよう。

apenasが近似否定で用いられる文・動詞句のタイプ類別に対して何らかの明確な制約が存在するかどうかは未検討である。ただ、教育的目的の記述などで、副詞はもともと任意的な要素で、すでにある構造に対して付加され得るものとして提示する場合は、apenasの対象ベースは肯定文でなければならないと規定するべきではないかと考える。すなわち、apenas+動詞とno+動詞~apenasを範疇的に交替する関係として扱い、いずれも動詞(=肯定動詞)に加えられた修正と見なすのである。

- (5) a. Duerme. → Apenas duerme.
 b. No duerme. → No duerme apenas.
 (6) Duerme. → Apenas duerme. /No duerme apenas.

つまり、(5)のように、肯定・否定のいずれの文にもapenasが適用され得、かつa, bで異なる機能をもつという見方ではなく[cf. (1)], 既述のように、(6)で示される図式を採用したい。

apenasは単に量の多寡のみならず、動詞の語彙アスペクトに関連して、時間

延長⁵⁾、頻度、完全性(十全性)、達成量、完成量などを内示し得る。poco<-> mucho, demasiado, etc.のgradationのさらに外れに位置する僅少を引き出すことになる。ただし、前述[cf. 2. apenas の原機能]のようにapenasが基本的に固有の量化提示を行うのではなく、その意味が副次的に導き出されると解釈する。

3.3.動詞の量化

他動詞(7)-(15)・受動動詞(16)・自動詞(17)-(20)・再帰動詞(21)のおのおの、支配項数は統語的に満たされて、かつ動詞句内にapenasが存在する。動詞句内部の量化のためには、apenasに代わる他の範列的選択肢として、例えば、poco, un poco, muchoなどの数量・程度を表す副詞を配置し得たような場合である。

- (7) Esperan de mí lo que nunca les daré, lo que pienso llevarme conmigo a la tumba. Por eso, aunque se cansen de intentarlo, apenas me molestan. [RC]

微量化の対象が動詞であることが上例(7)ほど明瞭でないケースも少なくない。

- (8) El, apenas si lee el periódico; [MN: 14/02/96]
 (9) Este año, como mis hijos apenas han visto la televisión, no sabían qué pedirme por Navidades... [MN: 07/01/96]
 (10) Este profesor de Derecho Penal apenas varía el gesto. [MN: 15/05/96]
 (11) El tío Roberto apenas levantó la vista de la lectura: —¡Hola! ¿Cómo amaneciste? [HS]
 (12) Su padre apenas le castiga y tú derrochas con él mimos y ternura. [QO]

多少、多寡などのスケールの延長上にあるのが一般的だが、(12)のcastigarに見られるように頻度に言及するものや、両者を兼ねたりあるいは、遂行、徹底性の度合いも含まれるかもしれない。

- (13) Su ironía y distanciamiento algo británicos apenas ocultan el entusiasmo por los asuntos que trata. [AB]

動詞 ocultarの直接目的語である「el entusiasmo(熱意)がほとんどないことを隠す」のではなく、「熱意があることをほとんど隠さない」と解釈されるべきである。

- (14) Irene calificó aquello de ceremonia pintoresca, porque nunca había visto morir ni a una gallina y apenas conocía a los puercos en su estado natural. [AS: 109]

この文では、確かに、彼女がこれまでに見た豚の“数”が無関係でないにしても、「知り方(経験)」の程度を問題にしている、「知らない」に近いことを主張する。前文の *nunca había visto* と並置されていることからして、“多経験～無経験”の連続の中で後者に接近することを意味している。

- (15) El público se componía principalmente de obreros y sus familias, muchos de los cuales apenas entendían inglés, pero el predicador aprendió algunas palabras claves en español [PI: 48]

「ほとんど理解しなかった」において、理解の対象が英語の量として把握し切れるとは考えにくいので、目的語の数量化を含み得るとしても、理解力のさまざまなあり方とその力量の評価に重きがあると見たい。動詞行為の十全、完璧さの対語としての *apenas* は下の例(16)にも感じ取れる。

- (16) Su figura apenas es conocida en Guipúzcoa. [PV]

主に類度の問題と解される、(17)(18)に類する用例はごく普通だが、かろうじて知覚出来る程度だという、動作の脆弱さ、感度の弱さを間接的に導くこともある[(19)(20)]。

- (17) La verdad es que apenas salgo por la noche. [TM]

- (18) Apenas hablaba, excepto con mi padre. [EL: 165]

- (19) Casi ni se le oía... Un hilillo de voz que apenas le salía de los labios... [MU]

- (20) Este hombre está muy débil, apenas le late el pulso. [LH: 29]

- (21) De su padre apenas se acordaba; [NB: 74]

4. 統語項の量化

動詞の項的要求が *apenas* の有無に関係なく既飽和状態にある点では、前項

で見た動詞の量化と異ならないが、文内のいずれかの統語項の近似的ゼロあるいは僅少を、動詞句内に位置するapenasが遠隔量化することで惹起している。数量限定として、例えば、mucho, pocoなどがその名詞句に前置されるのと同様な意味が動詞に先行するapenasによって表現されるのである。

4.1. 直接目的語の量化

直接目的語の微量を示すケースは所有の動詞haber, tener等に先行するapenasにしばしば見られる[(22)-(26)]。

(22) Cuando volví a abrir los ojos, apenas había luz detrás de la cortina. [TD: 63]

(23) A esta hora apenas hay tráfico. [AP: 15]

(24) ... estaban ocupadas, pocas, pero en el comedor, en recepción y en el ascensor apenas había habido variaciones; [TR: 165]

(25) ... el fenómeno apenas tiene precedentes. [MN: 25/02/96]

(26) ... fueron muy poderosos siglos atrás y que hoy apenas poseen importancia, [PS: 88]

4.2. 主語の量化

自動詞または再帰動詞の主語の数量を指示する場合が普通だが [Cf. (27)(28)], 他動詞構文でも、間接的に主語の量的関与の大小を暗示することがある。

(27) Apenas se encuentran las cifras en la información. [PA: 15/06/99]

(28) Apenas existen diferencias ideológicas o políticas entre ellos,.. [MD: 01/07/00]

「草がほとんど生育しない荒地」を意味している文(29)は、植物が「(普通の数だけ)生えていて、かつその育ちが非常に悪い」と解釈されにくい。「ほとんど草が生えていない」意で用いられている。

(29) La postal empresarial española sigue mostrando un paisaje yermo en el que apenas crece la hierba, o sólo prosperan las pocas especies, [MN:

16/02/96]

- (30) Los usuarios apenas notaron la huelga de Renfe gracias a los servicios mínimos. [PC: 30/07/99]

「利用者はほとんどRenfeのストに気づかなかった」のであるが、動詞notarの実現が未遂に近かったというよりは、気づいた人の少なさを問題にしている。los usuariosは明らかに総称的な複数表現だが、利用者全体の人々(=主語)についてストの存在がごく僅かに認識されたことを主張していないだろう。例(31)では、その僅少が主語に言及することが後続文で明言にされている。

- (31) Los entusiastas apenas reparan en ellos. Sólo uno se detiene, se cuadra delante del progenitor y dice: “Enhorabuena. Su hijo es un torero”. [PA: 24/04/99]

- (32) ... se conoce a los muchachos en Colombia-, del Meta, una región rural donde los niños apenas tienen escuela y su único futuro es recoger coca para los narcotraficantes, [MN: 25/02/96]

「子供らにはほとんど学校がない」というのは「ほとんどの子供たちに行くべき学校が存在しない」を意味し、子供各人に選べる学校の多少の問題ではない。言い換えれば、ごくわずかの子供にのみ学校が存在する、の意味にとれる。

動詞の項がapenasによって量的に制限されているのか、動詞の量化なのかそれほど明確でないことも多い。結果として両方の事態が引き起こされるからである。例文(33)で診察に来る人の少なさかなのか、あるいは通院頻度なのかは排他的でないように見える。

- (33) Entonces, ¿por qué apenas acuden los hombres a las consultas de los psicólogos y psiquiatras? [MN: 01/05/96]

4.3.補完目的語の量化

- (34) Armet cree que Barcelona no necesita una revisión global de su planificación urbanística en la medida en que apenas dispone de grandes espacios pendientes de ordenación. [VG: 19/01/95]

次例(35)では補完目的語が量化の対象として認められるのは明らかだが、一方で“言葉の必要性”への近似否定でもあり得る。

(35) Apenas precisaban de palabras para entenderse. [CM: 72]

(36) Otros sitios o no tenían artistas o apenas eran poblados. [VG: 18/02/95]

最後の文で, apenasは述語補語pobladosに関わるのではなく, この動詞に随行すべき補完目的語である“deに導かれる前置詞句”(居住者を表す)がわずかな数であることを示しているが, その実体は姿を見せない点で興味深い。もう1つの分析は原主語(能動文の主語)を量化しているが, 受動文ではそれが潜在化したという見方である。

4.4. 述語補語(属辞)の量化

(37) Otros, como las farolas, todavía no funcionan, un hecho que se suma a la larga lista de quejas de los vecinos, ya que de noche la acera apenas es visible. [PC: 12/03/99]

(38) Apenas es necesaria una mínima decencia humana para lamentar el cotidiano hacinamiento en plena calle de inmigrantes que buscan, día tras día, los redentores papeles capaces de normalizar su fragilísima situación en nuestro país. [PC: 10/06/99]

文(37)(38)では, 述語の中身が事実上否認されていて, hedge効果を期待した「否定の緩和」と言えよう。

4.5. ゼロ項の量化?

apenasは語彙範疇〈副詞〉の地位に甘んじており, それのみでは何らかの統語項の枠を埋める能力を持たないように思われる。動詞に必要な項が一見顕在しないで, apenasが現れているとき, 量的内容物を表すapenas自体が直接目的語の代理を務めるようにも見える。ただし, その成立条件としてapenasが特別に寄与するわけではないだろう。統語的資格は異なるが, 次文(39)(40)では, apenasによってpoco, muchoと同列上にある(食べ物の)極少量が示される。後説【出口(to appear)】のように, 寡黙な不定数量語algo/nadaと共起するとみなせば, これらのapenasは動詞よりも, むしろ動詞統語項に焦点を当てていると

分析できる。すなわち、「ほとんど食べない」を「ほとんど何も食べない」と言い換えられるようなケースである。

(39) Apenas comieron. El nerviosismo había anudado sus estómagos. [SI]

(40) En Río Blanco Policías apenas tienen para comer. [PD]

もし、apenasがcasi siempreの対極を意味するならば、動詞句内部で一種の頻度副詞の機能を演じるとみなされ、動詞comerの項的充足は微妙になる。(41)におけるapenasは昼食時の量とも頻度とも解釈可能だろう⁶⁾。

(41) TRINI. —Y, por eso, con lo poco que él le da alguna vez, le va dando de comer. Y ella apenas come. Y no cena nunca. ¿No se ha fijado usted en lo delgada que se ha quedado? [HE]

4.6.動詞迂言形(perífrasis verbales)とapenas

可能、達成の意味をもつpoder, alcanzarなどと用いられる動詞複合がapenasを伴う構造では、被支配動詞に対して「否定に近いごく少量」を含意する一方で、同時に支配動詞側での肯定的達成をも示している【Cf.(42), (43)】。特に知覚動詞を従える「できる」などにmucho,pocoの量的修飾が付加されるのは奇妙である。ギリギリ達成したか、しなかったかの境界域にあり、「やっと、ようやく、かろうじて」とも訳されるし、「ほとんど…ない」とも訳せる⁷⁾。統語形状は異なるが、意味的にはapenas+ble形容詞の形式もこれと同類のケースとして関連づけることができるかもしれない。

(42) —¿Por qué le exigía eso?—dijo al fin con voz que apenas alcanzaba a oír yo—. [MR: XXV]

(43) como la penumbra era bastante densa, apenas pudo percibir una sombra que se escabullía con agilidad ratonil. [PG]

(44) y como concluyendo una reflexión empezada, me dijo tan quedo que apenas pude oírla: “Entonces... yo recogeré todos los días las flores más lindas”; [MR:XI]

5. 終わりに

副詞apenasが単純に動詞を修飾するように見える場合でも、その意味の及ぶ範囲として、全動詞句を考慮することが不可欠であることは言うまでもない。それどころか、否定辞noのケースと同じように、被焦点要素とあいまって完成するその意味機能は、動詞句のみならず主語を含めて、述語事象全体の成り立ちを制限する量的側面、質的側面の様々な一角に投射されていることがわかった。ただし、このような周圈内要素との相互作用は、“全域に対するファジーな否定”と区別して考える必要がある。

副詞apenasが否定辞と近接した意味領域に出現すること、そして否定文と密接な関わりを持つことは前稿のいくつかの箇所を確認した。ところで、「否定」と「数量化」はどのように対立し得るのか、またいかなる点で性質を共有するのだろうか。分かりやすい具体的な語彙を当てはめて考えれば、apenasは否定辞noに代わる選択肢として選ばれるのか、むしろmucho, pocoに類する量化の段階の1つの現れなのか、という点である。例えば、文 No tengo dineroの利用場面を思い浮かべれば、手持ち資金の変動でその残金がゼロになった話者の発話であるという読みもある。また、「持ち合わせの金があるか」と質問されて、Noの返答の補足として述べられた文かも知れない。すなわちTengo dineroに対しての真偽についての情報が求められている場面でそれが偽であることの確認であるようなケースである。背後に潜む状況に感知してわれわれはこのような用途の差を感じることはできる。しかし、「私が所有する金銭が存在しない」という論理的内容は同じはずである。

このことから、apenasが否定辞noの使用または潜在を意識していることは明らかで、上記と同じように異なるコンテキストで両用に用いることができる。ただし、2値に還元された事態の有無が焦点として扱われるか、数量の多寡の延長線上に位置づけられるゼロなのか、その視点が弁別的な意味対立を惹起するようには思われない。

- (45) a. No tengo mucho dinero.
 b. *Apenas tengo mucho dinero.
 c. *No tengo apenas mucho dinero.

apenasが「モノ」や「こと(述語)」の量概念とは独立して、命題の真偽だけを問題にするnoの変種、一種の“弱偽性のマーカー”の役割を演ずる可能性をもつと

仮定すれば(45b, c)の文が成立してもおかしくない。言い換えれば、「私が金をたくさんもっていること」の真実性はほとんどない」という解釈を受ける、(45a)の真性頻度や可能性をおよそ打ち消すapenasの用い方は、muchoを伴う文に許されないことを示している。このことはapenasが自立した2機能を別々に内蔵していると分析しにくいことを示唆している。

(46) Apenas tengo dinero.

否定をゼロの量化と等価視するのと同様に、たとえ、(46)のような文が純粹に近似的な否定のニュアンスで用いられた場合であっても、それを微量量化として換算可能と考えられるので、本稿では、apenasがこのような数量化の働きを内蔵するという見地から分析した。

[注]

1. 例えば、現代スペイン語辞典(2001, 改定版3刷:p.101)はapenas全体を否定副詞に分類している。
2. sinと共起するapenasの構文の特色は本稿の考察に含めていない。apenas siについては例外的に一例、後出(8)を引用した。
3. sóloはb.の「下限評価」の機能も持ち得る。p. ej. Tiene sólo tres años.この用法ではapenasとの中和が生じる。
4. 単独に生起するとは、apenasの私的周圏において他の数量表現が現れないことを指す。
5. 終端限定的な語彙アспектを持つ『開始』の動詞に付加されたapenasは、事態実現後の短時間経過を標識化する。これはapenasの接続詞的用法と通じるので、ここでは考察しない。
 - i) México apenas ha comenzado con el uso del celular, al contar hoy con 2% de la población, [EX]
 - ii) En el primer reto ya afloran discrepancias y, en el segundo, el debate apenas se ha iniciado. [MN: 22/01/96]
6. 単起のapenasにだけ見られる両義性ではなく、数量詞と共起する下例のapenas...nadaについても、頻度・量が中和された数量概念と考えられる：Está tan flaco porque apenas come nada. [DI: 550]
7. 準否定no...apenasでは近似否定の解釈に傾くので、肯定的達成評価の読

みはなされない: Entre el dolor y el mal tiempo no pude salir apenas.
 「痛みやら悪天候やらでほとんど外出できなかった」[PA: 31/03/00]

例文出典

- AP: J. M. Riera de Leyva “Ave de paso”, Ed. Anagrama, Barcelona, 1993.
 AS: Isabel Allende “De amor y de sombra”, 6ª ed. Plaza & Janés, S. A. Barcelona, 1992.
 CM: Miguel Delibes “El camino”, 15ª ed. Ediciones Destino, Barcelona, 1991.
 DI: “Diccionario didáctico de español Intermedio”, ediciones s. m. Madrid, 1993.
 EL: Ana María Matute “El río”, 1ª ed. Plaza & Janés, S. A. Barcelona, 1994.
 HE: Antonio Buero Vallejo(1949) “Historia de una escalera”–Hiroto Ueda “Análisis lingüístico de obras teatrales españolas. (III)1987, p. 15.
 LH: José María Latorre “Una lección de historia”, 1ª ed. Montesino editores S. A. Barcelona, 1989
 MU: Joaquín Calvo Sotelo(1954) “La muralla”–Hiroto Ueda “Análisis lingüístico de obras teatrales españolas. (III)1987, p. 79
 NB: Minguel de Unamuno, “Niebla”, 3ª reimp. Alianza Editorial, Madrid, 1993.
 PI: Isabel Allende “El Plan Infinito”, 1ª ed. Plaza & Janés, S. A. Barcelona, 1991.
 PS: País Semanal, Núm 69 Domingo 14 de junio de 1992, Diario El País.
 TD: Soledad Puértola “Todos mienten” 4a ed. Ed. Anagrama, Barcelona 1988.
 TR: José María Latorre “Las trece campanadas”, 1ª ed. Montesino editores S. A. Barcelona, 1989.

例文出典（電子化データ）

- AB: ABC Cultural 19/01/96 (Real Academia Española, Banco de datos del español).
 EX: Excelsior, Excelsior Cia. Editorial, Lunes 21 de septiembre de 1998.
 HS: David Escobar Galindo “Historias sin cuento”–Revista “Ella”, suplemento de Prensa Gráfica(El Salvador), 28/05/98.
 PC: El Periódico de Catalunya, Ediciones Primera Plana, S. A. Grupo Z.
 PD: La Prensa Digital(Nicaragua), 28/05/00, Nacionales
 PA: El País Digital, Diario El País, S. A.
 PG: Prensa Gráfica(El Salvador), Revista Dominical, Abril 1998.
 PV: El diario País Vasco, 08/01/96.
 QO: Revista “Quo” No. 33, 1998.

- MD: Diario El Mundo, El Mundo del Siglo XXI, S. A.
 MN: El Mundo en CD-ROM/Primer Semestre 1996, Mundired.
 MR: Jorge Isaac "María" Biblioteca Familiar Colombiana, edición de 1996 de la Presidencia de la República.
 RC: Noel Luna "El recluso" 1996, Proyecto Sherezade: Cuentos.
 SI: Elena Buixaderas "Sueño de invierno"-Cuentos Globales No. 9, Marzo 1998.
 TM: Telémaco, Noviembre 1997.
 VG: La Vanguardia en CD-ROM, 1^{er} semestre 1995, La Vanguardia electrónica, Barcelona.

参考文献

- Diccionario Salamanca de la lengua española(1996). Santillana/Universidad de Salamanca, Madrid.
 González García, Luis(1997): El adverbio en español. Universidade da Coruña.
 Sánchez López, Cristina(1999) "La negación" en Ignacio Bosque y Violeta Demonte(eds.) Gramática descriptiva de la lengua española II, pp. 2561-2634
 出口厚実(1998)「apenas: 否定性に関わるいくつかの特徴(1)」-Estudios Hispánicos 23, pp. 31-40
 - (1999)「apenas: 否定性に関わるいくつかの特徴(2)」-Estudios Hispánicos 24, pp. 1-12
 - (to appear)「apenasと数量表現」-大阪外国語大学論集